

プトレマイス

——プトレマイオス朝の失われた都市

J. G. マニング

(周藤芳幸・柴田淑枝訳)

イエール大学古典学部教授

はじめに

本日は、私が15年以上もの間、関心を抱いてきて、ようやくその調査にとりかかろうとしているエジプト南部の都市プトレマイスについてお話する機会をいただき、ありがとうございます。間もなく当局からの発掘許可が下りると思いますが、何分にもエジプトのことなので、「神の意のままに」と言わざるをえません……（註 その後、2011年春の革命により、エジプトでは外国隊による発掘調査のペンディング状態が続いている）。

では、少なくともアメリカの古代史研究ではあまり注意を払われることのない問題点についてから話したいと思います。古代史というのは、古代の史料に基づく研究です。その素材は記述されたもの、テキストや考古学的な遺跡や遺物などになります。しかし私としては、テキストによる調査と考古学的な調査、どちらにとっても、それらの調査を始める前に、まず研究課題を定立することこそが大切だと考えています。

私の最新刊は、『最後のファラオ』というタイトルで、私が取り組んできたことをこの本でまとめたのですが、約1年前に出版されました。プトレマイオス朝の歴史についての私の課題が、この中に記されています。スライドに示したのは、ほんの2、3に過ぎません。本当はもっとあるのですが、これらが現段階での私の課題になります。

最初の課題ですが、プトレマイオス朝がどのようにして古代の官僚帝国を支配し統治したのかということです。プトレマイオス朝は、ギリシア人によって形成されましたが、彼らは外部から古代エジプトに侵入してきた者なのです。どうやってそのようなことが起こったのでしょうか？ 通常、そのような出来事は周知の事実とされています。しかしその支配の過程には、考えなければいけないたくさんの重要なポイントが含まれていると思います。

私をひきつける2つ目の課題ですが、エジプト史と一般的な前近代国家双方における、広い歴史的な文脈の

中でのプトレマイオス朝を、我々がどのように理解してきたのか、という問題があります。プトレマイオス朝エジプトを、紀元前3世紀ごろの特異な現象としてとらえるのではなく、古代国家という広い文脈から捉えてみると、他の場所、他の時代とは、どのような点が異なり、どのような点が似ているのでしょうか？

さらに言えば、エジプトにおけるプトレマイオス朝の統治の影響とは、どのようなものだったのでしょうか？ プトレマイオス朝は、ギリシア人がエジプトにやってきてから3世紀もの間エジプトを治めていたわけですが、彼らの影響とはいかなるものだったのでしょうか？ エジプト国内でのギリシア人とエジプト人との関係は、どうなっていたのでしょうか？ しかもこれらの課題のすべてが、まさに重要なことなのです。きわめて単純なようにも聞こえますが、実際には、そこに経済発展や政治的発展などを含めた、非常に複雑な問題が絡み合っているのです。

この問題は、何よりもまず制度的なものです。プトレマイオス朝エジプトは、おそらく、制度や制度の本質についての研究にかけては、前近代社会全体の中でもっとも進んでいるところだと思います。ギリシア人による制度、エジプト人による制度、それらが時を経て変化しているところだったのです。プトレマイオス朝の歴史から、人はどのように古代史を構築していったのかといった、本当に重要な問題を考えることができます。これは1つの事例であり、我々がどのように歴史を構築していくのか、どのように史料の持つ問題点を克服していくのかといったことを見ていくことが可能です。しかし、私自身の研究は、経済史に焦点化されています。それに、何度も言いますが、プトレマイオス朝は、古代の経済を理解する上でも、大変に重要なのです。

このスライドには、プトレマイオス朝の経済について私が興味を持っている事柄が列挙されています。たとえば、国家の役割と人口動態との関係、これは単純に言えば、ギリシア人がエジプトに流入してからの人口の動態に関わる問題です。このことが歴史的な変化

を引き起こしたのでしょうか、それとも、これは国家の制度に起因していたのでしょうか？ これは、どの時代の歴史を研究している歴史家にとっても非常に大きな問題となるでしょう。プトレマイオス朝の事例は、こういった疑問に答える上で、重要なものになってくると思います。

プトレマイオス朝の時代には、都市化が進んでいます。大きなギリシア人の都市、もちろんアレクサンドリアもそうです。アレクサンドリアは、地中海で最初の大都市で、きわめて重要な場所にあります。プトレマイオスも非常に重要な場所ですが、ここについては、後でお話するように、ほとんど分かっていません。

プトレマイオス朝が紀元前3世紀にエジプトを統治し、農業生産力が高まり、新しい施設や銀行、王立の穀倉（グラナリー）などがエジプト全体につくられ、行政用語としてはギリシア語が用いられるようになり、経済の全体的な構造がつけられました。ある意味、経済の新構造、つまり、新しいインセンティブが生まれたのです。

たとえば、経済発達における賃金労働者の使用や、新しい課税方針など、今の時代の我々にもなじみのあるものがあります。これらは皆、経済的な変化を理解する上で重要です。そして、プトレマイオス朝時代のエジプトは、少なくとも地中海の歴史においてこういった経済的な変化を理解するのに、現状では最も適した場所と言えるのです。ですから、プトレマイオス朝エジプトは、歴史上において大変に重要な時代なのです。

また軍隊は、システム全体のカギとなります。新しい財政システムは、軍、つまり戦争によって動かされていました。これは、紀元前4世紀末の地中海では典型的な現象です。ヘレニズム時代には、多くの戦争が起きています。しかし、国の80%近い予算が軍に使われていたことを考えるとき、これは非常に大きな数字だと言わなければいけません。戦争を戦い、軍のために支払うということは、この経済変化の大きな説明要因となります。ですから、経済変化における国家の役割というのは、基本的な重要性を持っていると言えるのです。

プトレマイオス朝史について私が興味を持っていることの1つに、プトレマイオス朝がその長い治世の中で、エジプトの歴史にどのように適応していったのか、という問題があります。古代エジプト史における最後の王朝としてプトレマイオス朝を見るならば、実際、これはエジプト史上最も長く続いた王朝になります。

す。有名な王朝と言えば、たとえばツタンカーメンで有名な新王国時代の第18王朝などが思い浮かびますが、プトレマイオス朝は日本の徳川時代とほぼ同じくらい長いと思います。これは注目すべき点だと思いますが、通常、プトレマイオス朝が政治的に永続的で安定した体制をとっていたという事実は、過小評価されています。この点については、歴史的にもさらなる説明が必要でしょう。プトレマイオス朝が長く続いたということは、単なる偶然ではないと思います。

プトレマイオス朝エジプトとその世界

こちらは、プトレマイオス朝最盛期の地図です。海岸線がここをずっと、このあたりまであったと思われる。

エジプトは、王国の要となる場所ですが、プトレマイオス朝は、紀元前3世紀にキュレネ、エーゲ海島嶼部、キプロス島、そしてトルコの海沿いを支配していました。しかし、エジプトは、最重要地点であり、こここそがプトレマイオス王国と言えるところなのです。海外領については、キプロスとキュレネは比較的早く手離されることになり、もちろんこのあたりの地域（フェニキア）は、プトレマイオス朝時代の多くの時間を費やして、プトレマイオス朝とセレウコス朝との間で、激しい取り合いが繰り返されていました。私は主にエジプトに着目しているのですが、それというのもエジプトに興味があるからだけでなく、エジプトが3世紀にもわたってプトレマイオス王国の要となったからなのです。

この王国について興味深いことの1つとして、過去のエジプト王国を継承していることが挙げられます。彼らのイデオロギーというか象徴はファラオ、王の布告の言葉を体現するものとしてのファラオであり、こういったことは1000年以上も前から続いていましたが、王の布告の言葉、王という象徴、こういったことが王国の本質にあったと考えています。

プトレマイオス朝は、古代エジプトを注意深く観察することによって創造された国だと言えます。この点は非常に重要で、プトレマイオス朝の政治的側面は過小評価されていると私は思いますが、1000年以上もの時を遡るといのはすごいことだと思います。おそらくエジプト人の神官が、この体制、つまりイデオロギーを重視する体制を保つのに深く関与していたからに違いありません。

過去には、プトレマイオス朝エジプトを研究する学

者たちが、これを極度に中央集権化された統制経済に基づく国家であると主張していた時代もありました。私はこの本ではかなり異なった見方をしていますが、かつては私も同じように考えていました。このことについては、以前にもここ名古屋でお話したことがあるかと思いますが。私は、組織及び組織の中での人間の行動、そして、中央集権国家とは相対する地方社会などにも関心があり、組織構造と個人の営みの間のバランスなどについても解明していきたいと思っています。

私に関心を抱いているのは、単に国家がどのように構造化されているかではなく、人間が国家の中でどのように行動するか、どうやって移動するかとか、プトレマイオス朝国家の要求をどうやって受け入れたらつき返したりするか、などです。こういったことは彼ら自身のテキストにかなり良く文書化されていますが、しばしばそのことは忘れ去られています。もし、構造と人間行動の間のバランスや、王の視点から見た国家の目的と地方社会のそれとのバランスについて考えることができれば、この3世紀間に起こった出来事について、今までと全く異なった図が描けるのではないかと考えています。

史料をめぐる問題

プトレマイオス朝エジプトとローマ期のエジプトは、パピルスによって広く知られています。よい例がここにありまして、ギリシア語が記されたパピルス（ゼノン文書）です。この時代のエジプトから出土したパピルスは数多くあり、50,000点以上もの文書が公刊されています。これは過去の研究者たちが注目していたものですが、パピルスに書かれたもので、主にギリシア語のテキストとなっています。確かに、実際に書かれたものすべてが、現代まで残っているわけではありません。ですから、パピルスだけを史料として使っている歴史家がいたとしたら、この時代の社会についてそれほどよく理解できていない危険性があります。この時代の文書は膨大にありますが、それでも、現代まで残されたものの割合は低く、この時代を正しく解釈できるかということについていえば、そういった史料の少なさがすべての問題を引き起こしているともいえるわけです。

もちろん、ほかの文書、つまりエジプト語によるパピルスもあります。ギリシア語と同様にエジプトの文字で書かれた文書です。学者たちは、この時代の文化について、ギリシア的な側面を強調しすぎるきらいが

あります。ただし、それはあくまでギリシア語のパピルス文書に基づく見解です。私が昨日お話ししたように、この社会を理解するには、もっと異なった方法論が必要なのではないかと思います。他の文明とも比較する必要がありますし、過去にエジプトで起きたことを理解する助けとなる考古学が必要となります。プトレマイオス朝エジプトの歴史家たちは、パピルスを読むことに研究の重心が傾きがちなので、ギリシア語のテキストを重視しすぎるきらいがあるのですが、私の見解では、それには深刻な問題があります。私は、次世代の学生たちを訓練するにあたり、今とはかなり異なった方法をもっと一生懸命考える必要があるのではないかと思います。

国家の文化的側面やギリシア語による史料を過大視することで、学者たちは、ギリシア人の人口についても強調してきました。プトレマイオス朝時代のエジプトでは、彼らは10%にも満たなかったので、ギリシア語のテキストはある特定の地域から出土する傾向にあるのですが、これはエジプトでは非常に特別な場所です。学者たちは、エジプトの残り90%の住民を差し置いて、この10%の住民の文書を強調してきたのでした。

ですから私は、新しい地域と古い地域、ギリシア人と人口の大部分を占めるエジプト人との間のバランスに興味があります。あるアーカイブ、有名なゼノン文書ですが、これがプトレマイオス朝エジプトについての議論で優位に立ってきました。とても膨大で、2000近いテキストからなる非常に面白いものですが、ファイユームという地域に由来しています。しかし、このファイユームというのは、エジプトにとって典型的な場所ではないため、これらのテキストがエジプトの典型であるとは私には考えられないのです。つまり、これらのテキストは、エジプトで起きたことやプトレマイオス朝時代の一般的な出来事を反映しているとは言えないのです。これらのテキストが示しているのは、ある特定の種類の情報にすぎないのです。この特殊な地域の静的な分析といってもいいかもしれません。

ゼノン文書は、前3世紀の10年ほどをカバーしているだけです。ある一地域のたった10年を強調して捉えるということには、歴史的にみても、問題のあることが明白です。これは、300年間も続いたプトレマイオス王朝史を代表するものではありません。この文書によって、プトレマイオス朝はきわめて効率的な国家であり、よく統制された専制政治を行っていたと見なされる傾向があります。ある一地域のある期間だけ

に関わる特殊な史料に依存すること、そして中央集権的な専制国家としてのプトレマイオス朝像を強調すること、これらはどちらも間違っていると私は思います。

ファイユームの特殊性

そこで私は皆さんに、ここでエジプトやプトレマイオス朝時代の2つの異なる図を示してみたいと思います。1つは標準的な地図であり、もう1つは重要な地点を記した現代のエジプトの衛星画像です。ここがアレクサンドリア、そして古代エジプトの首都であるメンフィス、ファイユームはここです。プトレマイオス、これは後でもう少しお話しします。それからエドフという重要な神殿のある都市、このベレニケという港湾都市は、紅海からアレクサンドリアへ、そして地中海へという交易を担っていました。これが全体的なエジプト、ギリシア人によるエジプトです。研究者たちはアレクサンドリアという巨大都市について議論を集中しがちですが、アレクサンドリアは有名な灯台や有名なムーセイオンがある、きわめてギリシア的な都市です。そしてこの都市は、歴史的にみても非常に重要な場所でした。そこには、おそらく20万人を超える人が住んでいました。紀元前3世紀には名実ともに大都市となり、それほどの大都市をこれほど長い間維持することができたということが、プトレマイオス朝の隆盛を内外に示すものとなっていたように私には思われます。ですので、この都市の重要性に疑問をさしはさむ余地はありません。しかし私は、アレクサンドリアやファイユーム以外にも、エジプトには重要な場所があったと考えています。

ファイユームはこのあたりにあって、紀元前3世紀にプトレマイオス2世および3世の治世下で再開発されました。紀元前3世紀にはたくさんの人植者によって3倍に開拓されて人口流入が生じた、プトレマイオス朝にとって大変に注目すべき一帯なのです。そういったことから、プトレマイオス朝史ではこの地域が強調されてきました。しかし、問題は、ここがエジプトの国土全体のたった5%を占めるに過ぎない新興地だという点です。プトレマイオス朝時代のエジプトにおいて典型的だといえるような土地ではないのです。ギリシア人の住民の多さや、ここがギリシア語パピルスで強調されているために、文献上ではしばしば取り上げられてきているのですが……。

さて、こちらはファイユームの中でも、フィラデル

フィアと呼ばれている遺跡の20世紀初頭の写真です。ファイユームの、北東の端に近いところで、プトレマイオス朝の統治の礎となったところです。ゼノン文書もここから出土しました。この古い写真からでも分かるように、格子状の街路がめぐらされていて、プトレマイオス朝時代には、この街路が市の郊外へと広がっている重要な都市だったことが分かります。ここは、全体的にきちんと発掘された数少ない都市のうちの一つですが、もちろんここでさえ、考古学的にはいくつかの問題点があります。たとえば、この都市の発展の様子、新たな開発の状況、都市の規模、住民構成など、まだまだ疑問点は山のようにあります。それでもここは、われわれがこの時代のエジプトを知る上で数少ない、調査の行われた都市なのです。

フィラデルフィアから出土したゼノン文書は素晴らしいもので、このアーカイブのテキストは、読む価値の高いものです。それは、フィラデルフィアの発展の様子を記録した有名なテキストを含んでいます。ここにちょっと詳しくお見せしましょう。これは、ある大きな私有地の見取り図です。これは灌漑路と考えられており、プトレマイオス2世の宰相（アポロニオス）所有の大農園をうるおしていました。このように、ゼノン文書は見どころ満載の史料で、我々に様々なことを教えてくれます。こういった私有地がどのように運営されていたのか、新しい作物がどうやってギリシアからもたらされたのか、たくさんの実験の様子や、新しい動物がどうやってこの地に入ってきたのか、なども書かれています。この大私有地はプトレマイオス2世の宰相に私有地として与えられたものですが、原則的にここでの収穫物が彼の給料となっていたのです。

この土地で様々な物事がどうやって発展していったかを知るのは非常に面白く、この文書には、どうやってそういったことがなされたのか、どうやって6000エーカーほどもあるこの広い土地を管理していたのかなど、詳しいことまでが記されています。日本の単位を知らないので、エーカーで言いましたが、とにかくフィラデルフィアの中でもとりわけ大きな農園でした。

ゼノン文書の現存史料の記述は、ギリシア人による大土地開発やたくさんの実験などが、エジプト全土にわたって起きていたかのように思われますが、それは違います。実際、これはかなり例外的なことで、この手の活動、新しい土地を開発していくつもの実験的作業を行うことは、この時代のファイユームに限られたことだったようです。ですからこれは、典型的な長期

間にわたる出来事というよりはむしろ、例外的で短期間の出来事であると言えるのです。大農園におけるギリシアの実験と言ってもよいかもかもしれません。

この点に関して重要なことは、エジプト的な農業というものが、プトレマイオス王朝がエジプト全体を支配する以前から行われてきたということです。ですから、膨大な史料があって、歴史家たちがこの史料を大変注意深く研究してきたという経緯はあるものの、ファイユームでのこういったことはどちらかというと例外的な事象であり、このアーカイブが強調されすぎているくらいがあるという印象は否めません。

この種のアーカイブは独特なものというわけではありません。ペルシア支配時代にもこのような所有地は存在していましたし、ローマ時代には、さらに典型的なものとなっています。では何が重要かと言えば、他の学者たちはあまり指摘していないのですが、経済におけるプトレマイオス朝の影響力ではないかと私は思います。もし、前代からのエジプトの農業による栽培作物の種類や規模がそのまま受け継がれただけだったとすれば、プトレマイオス朝は、経済構造にそれほど大きな影響を与えなかったでしょう。実際、大きな変化はローマ時代に起きているわけで、プトレマイオス朝時代には、それほど大きな変化がなかったからです。

ですから、フィラデルフィアのプランテーションについて述べられたこの非常に興味深いテキストが注目されることとなります。エジプト北部のファイユームという、どちらかと言えば例外的な場所は、私の研究の中で最も興味深く思われる場所であると同時に、歴史的・文化的にみても、エジプトの中ではかなり特殊な場所でもあるのです。

では、なぜこのようなことが問題となるのでしょうか？ それは、プトレマイオス朝が行ってきたことを理解する上で重要であるからだと思えます。彼らは、ある意味エジプトを統治する目的でエジプトに侵入しましたが、エジプトがどのように機能しているかという知識も豊富に持っていました。エジプトにはいくつもの地域があって、それぞれに統治構造がありましたが、プトレマイオス朝の支配者は、それらについて非常に注意深く理解していたようすし、私としてもそれは注目すべきことだと考えています。

上エジプトの状況

上エジプトは、農業的にも文化的にも、他とは異なる

地域でした。ですから、プトレマイオス朝はこの地域に対し、他とは異なる扱いをしていました。これは上エジプト一帯で、広い私有地を抱えたとても大きな神殿があることで有名です。ファイユームとは違って、プトレマイオス朝はここには手をつけませんでした。それはプトレマイオス朝にとってここが新しい地域だったためです。

上エジプトは、プトレマイオス朝が神官団を支配する何千年も前から、神殿によって支配されていたところ。プトレマイオス朝時代には、この図で示しているように、エジプト人たちによる動物崇拝が盛んでした。たとえばメンフィスにはアピス（聖牛）がありますが、プトレマイオス朝は、エジプト人の宗教的な伝統や宗教的儀式なども受け継いでいます。つまりこういった点に、プトレマイオス朝のストラテジーがよく示されているのです。エジプトの地域によって、それぞれ異なる統治が行われていたのです。

上エジプトの写真を2、3枚見ていただきましょう。プトレマイオス朝の時代に、上エジプトでは50ほどの神殿が建造もしくは再建されています。このような状況は上エジプトに限られていて、他では見ることはできません。この点に関する考古学の知見が正しければ、今度はそれが重要な問題を提起します。なぜ、そのようなことが起きたのでしょうか？ なぜ上エジプトに限定して神殿の再建がおこなわれたのでしょうか？

もしそれが本当だとしたら、これこそがプトレマイオス朝の戦略の重要な要素となってくるのですが、プトレマイオス朝は、神官と政治的な関係を築くために神殿を再建したと考えられるのです。というのも彼ら神官こそ、エジプト全体、つまり王国全体を統治する役割を担う存在だったからです。

神官たちや神殿は、裕福であつたばかりではなく、政治的にも非常に重要でした。プトレマイオス朝時代には、王たちの命を受けたエジプト人の神官たちによって二言語で刻まれた碑文がたくさんあります。彼ら神官たちは、政治的にも重要な位置を占めており、プトレマイオス朝の支配者たちは、そのことを知っていただけではなく、彼らとの関係を創り上げていったのです。特に上エジプトでは、彼らとの関係はとても重要だったと考えられます。

上エジプトの神官は、ギリシア語とエジプト語（デモティック）で書かれたたくさんの文書を残しています。それらはしばしば、こういった感じの土器の中から発見され、多くは家族の文書で、ファイユームから

出土するギリシア語のテキストとはかなり異なっていますが、村の生活などについて豊富な情報を提供してくれま

す。これはエドフの神殿の写真ですが、ここは大変重要な場所で、プトレマイオス朝時代に最初に再建された神殿です。紀元前3世紀におけるエドフの神殿の再建は、プトレマイオス朝が神殿再建によってこのあたり一帯を支配する具体的な計画をもっていたことを示唆しています。単に宗教的な施設だったわけではないのです。

これらの神殿は経済的に重要であり、また交易の要所に立地していました。エドフは、紅海から東方砂漠を横切る交易ルート、アフリカ内陸部から戦象や黄金をもたらす交易ルートなどの結節点に位置しています。ですから、神殿を再建するという事は、上エジプトを支配しようという大きなプロジェクトの一部だったのです。

エドフの他にも、コム・オンボなどの有名な神殿がありますが、それらはエジプト人の神殿でありながら、ある意味でプトレマイオス朝の建造物ともいえます。これらの神殿の建築様式は、プトレマイオス朝に独自のものとなっています。エドフ神殿は、プトレマイオス朝時代の神殿の中では最初に再建されたものですが、エジプトの神殿の中では最も丈の高い塔門を持っています。アレクサンドリアの場合もそうですが、巨大な建造物はヘレニズム時代の特徴でもありました。ですから、これはエジプトの神殿なのですが、この塔門に関してはヘレニズム時代の建造物だということが分かります。これは、ヘレニズム世界全体の風潮を反映している点で、とても興味深いことです。これについてはこれまではあまり研究されてこなかったように思いますが、単純にエジプト文化とギリシア文化との対抗関係で考えるべきではないでしょう。考古学的に見たとき、この物質文化にはヘレニズム文化に独特のものがあります。それはギリシアでもエジプトでもない、何か別のものです。

上エジプトでは多くの神殿が再建されました。エドフの場合は、とても古い門前町とでもいうべき都市でした。最初期の神殿の建造は、エジプト史の始まりにまでさかのぼります。ここでは古くから祭儀が行われていましたが、現在目にするのできる神殿は、紀元前3世紀に更地に再建されたものです。こういったことは、上エジプトのナイル川沿いの各地で行われたのですが、1つだけ例外があります。それがテーベというきわめて重要な場所で、そこでは神殿が再建され

ることはありませんでした。

その代わりにプトレマイオス朝がテーベで行ったのは、門を建てることでした。これは、テーベ西地区のメディネット・ハブの門です。プトレマイオス朝は、神殿を再建するのではなく、古代の神殿の周りに新しい門を建築したのです。これが私にとっては非常に興味深い点で、新しいギリシア人の都市プトレマイスにも関わりがあります。すなわち、プトレマイオス朝は、何らかの政治的な意図があって、テーベとその神官たちを避けていたと思われるのです。

テーベは大変に有名な都市で、少々反体制的ともいいましょうか、テーベの神殿の神官たちは、エジプトの帝国主義の伝統のなかで新王国時代以来の祭儀を継承していたので、プトレマイオス朝も彼らとあからさまに対立することは望みませんでした。そこで、プトレマイオス朝は、テーベの神殿を再建する代わりにその周囲に門を建てて神殿を囲い込んでしまうことにより、その勢力を封じようとしたのです。

確信をもって言えることではないにせよ、こういったことは特別な戦略であったように思われます。テーベに神殿を再建するのではなく、これら古い神殿の周りに新しい門を築くだけで、そこに神殿を直接再建しなくとも、そこがプトレマイオス朝の支配下にあるということを十分示すことができたわけです。そしていづれにせよ、この時代にテーベで立派な神殿が築かれなかったのは、単なる偶然ではないと思います。

神殿の再建をしたくなかったのには現実的な理由があったのだと思いますが、とにかくこういったことは、上エジプトを支配するストラテジーの一部であったように思います。このことに関して、講演の最後に時間があつたら、テーベの反乱についてもお話しすることにしましょう。ともあれ、テーベというのは、政治的にはある種治安の悪い地域であって、プトレマイオス朝はそこを支配下に置きたかったのですが、直接介入して神官を取り除くまでには至りませんでした。

さて、話を戻しまして、エジプト文化とギリシア文化についてですが、実際ここには、2つの文化の対比という以上の複雑なものがありました。すべての神官や神殿が同じ立場だったわけではありません。誰もがエジプト文化に同調するというわけでもなければ、ギリシア文化に同調するというわけでもなかったのです。実際、非常に複雑な社会だったのは驚くべきことではないのですが、ただ歴史家たちは、すべての神殿や神官たちが一様に同じ考え方だったのではなく、皆が皆プトレマイオス朝を受け入れていたわけではな

ったという複雑な事情を、どうも忘れがちであるようです。プトレマイオス朝を受け入れていた者たちもいましたし、プトレマイオス朝の支配に抵抗していた者たちもいたのです。

上エジプトの中心市プトレマイオス

さて、ここからは、プトレマイオスに話を移しましょう。ここは歴史的にみても面白い都市で、上エジプトのナイル川沿いにあります。美しい写真が1枚ありますのでご覧くださいませ。

上エジプトに関して、私には偏見があったことを認めなければなりません。そこへ行って初めて、美しい場所だということが分かりました。ここにプトレマイオスがあります。下の方にテーベ、そしてさらに下に現在のアスワンがあります。プトレマイオスが位置しているのはケーナの北でソハーグの南です。ソハーグは上エジプトでもかなり大きな都市ですが、かつてのプトレマイオスの遺跡は、現在のエル＝マンシャという村にあります。

歴史的にみて、ここは非常に興味深いところです。古代のファラオは2つの都市を必要としていました。新王国の場合には、メンフィスとテーベです。プトレマイオス朝はそれと全く同じことをしたのです。エジプトの北と南のそれぞれに、行政の中心地が必要でした。エジプトの国土は、砂漠を除くときわめて不規則な形をしているからだと思います。エジプトは、長さ500マイル×幅20マイルという細長い形をしています。ですので、エジプトを統治するのに少なくとも2つの中心地が必要だったのです。プトレマイオス朝は、この古代の行政パターンを踏襲しました。ただし、今度は二つのギリシア的な都市だったことが重要です。これらは二つのポリスであり、ギリシア人の法律、ギリシア的な市民権などを持ったギリシア的な都市でした。

アレクサンドリアはある程度知られていますが、プトレマイオスと呼ばれるこの場所は、不思議なことにほとんど知られていないので、もっとよく知りたいと思っています。ここはプトレマイオス朝の中では重要な場所です。何と言いますか、ストラテジーとして、これら2つの都市が建設されたわけです。アレクサンドリアには大きな港があり、南部の行政中心地がプトレマイオスでした。これらの都市は同時期につくられています。私は、プトレマイオスの方が早く完成したのではないかと思っていますが、とにかく、プトレ

マイオス1世によって紀元前310年ごろにつくられたと考えられています。

こういう統治方法は大変に賢明であると思います。プトレマイオスはかなり早くから、エジプトを統治するために2つのギリシア人の拠点を必要としていました。肝心なことは、エジプト人の都市ではなくギリシア人の都市によってエジプトを支配することであり、その点こそが重要なのです。

さて、問題はプトレマイオスについて何が分かっている、今後どんなことが分かりそうかということです。たとえば、プトレマイオスは、紀元前310年ごろにプトレマイオス1世によってつくられました。プトレマイオスは、上エジプト全体を統治する行政の中心地でした。そして、関係するたくさんの人物の名前もわかっています。ほとんどが紀元前2～1世紀頃の人です。プトレマイオスは法律の中心地でもあり、すべての王立裁判所がここを拠点としていました。また、ナイル谷全体を管轄する財政の役所もプトレマイオスに置かれていました。つまりここは、プトレマイオス朝が動かしている非常に重要な行政の中心地だったわけです。

パピルスから多くのことが分かりますが、その大半は紀元前2～1世紀のことです。紀元前3世紀の史料はそれほど多くありません。ちょっと驚くべきことかもしれないことについては、不可解な気がしています。考古学者の間で問題となっているのは、紀元前3世紀の痕跡はどこへ行ってしまったのか、ということです。紀元前2～1世紀と比べて3世紀の都市がどれくらい大きいものだったのか、それについては全く分かりません。

これは、この地域の様子です。ソハーグについては、衛星写真から大きさが分かると思いますが、非常に大きな都市です。ナイル川の東側には、アクミンという古くから重要な役割を担ってきた都市があり、エジプト学の中でも非常に重要な遺跡となっています。イギリスの博物館収蔵物の多くは、このアクミンの墓域から発掘されたものです。ここも、プトレマイオス朝時代には重要な都市でした。

さて、問題の一つは、なぜプトレマイオスがエジプトのこの地域に置かれたのかということです。なぜ、それは歴史的に見て通常の行政の中心地というべきテーベではなかったのか、なぜプトレマイオス朝はテーベにとどまりたくなかったのかという問題です。確かに、テーベを統治の中心にすることは、政治的に難しかったかもしれません。それにしても、これほど古く

て大きなエジプト人の都市の近くに新しい都市を造った理由は何だったのでしょうか。

アクミンからそう遠くはないところ、川の西側のここにエル＝マンシャという村があります。アクミンの重要性については後ほど触れますが、それはさておいて、この写真は農業の発展をよく窺わせてくれると思います。ここには大きな灌漑用の運河が19世紀につくられています。ムハンマド・アリーによる運河で、ちょうどプトレマイスの中心というかすぐ西側を通過しているので、おそらく遺跡を壊していると思われる。ここには広大な農地が広がっていて、川の東側は、砂漠とかなり広いワジ（涸れ谷）となっています。

採石場についても、関心があるのではないかと思います。採石場は川の東側にありました。プトレマイオス朝の都市の石材は、これらの採石場から切り出されたものです。ギリシア語やデモティックによる採石場のグラフィティが、1894年に公刊されています。120年前に10のグラフィティです。もし古代の採石場がまだそこに残っているのなら、記録されていない何千ものグラフィティが眠っているかもしれません。これらは今後の皆さんのプロジェクトとなっていくでしょう。しかし、採石場については、現段階では何ら情報がありません。これもプトレマイスをめぐる謎の1つだと言えます。

いくつか、興味深い史料を紹介しましょう。紀元前1世紀に、ストラボンがプトレマイスについてこのように述べています。「テーベ管区の最大の都市であり、メンフィスに匹敵する規模をもつ。ギリシアの都市に倣った統治形態をとっている……」

ここで私が興味深いと思っているのは、プトレマイスがメンフィスに匹敵するほどの大きな都市だったと述べられている点です。もしそれが本当だとすれば、そしてこの紀元前1世紀の時代にそうだったとすれば、ですが。メンフィスは、プトレマイオス朝時代には10万人規模の都市でした。ですから、もしこの話が本当かそれに近い話だとすれば、その半分のサイズの都市だったとしても、上エジプトでは相当規模の都市ということになります。テーベ級の都市だったのかもしれませんが。しかし、それが本当かどうかを知るには、考古学的調査をまたなくてはなりません。

都市の規模の解明は考古学の仕事であり、史料からは知るすべがありません。ですから、それも私の疑問の1つなのです。プトレマイスは、いったいどれくらい大きかったのか？ プトレマイスの植民史はど

のようなものか？ 紀元前3, 2, 1世紀、そしてローマ時代に向けて……。われわれはこの点について何も知っていません。ただ、考古学だけが手がかりを与えてくれるのです。

ストラボンにもまして興味深いのが、ヘロドトスの言及です。ヘロドトスは、アクミンの宗教的儀礼について、それがギリシア的なものとエジプト的なものが混じったものだったと述べています。そこでは、非常に面白い文化的現象が起きていたのです。また、彼は、ネアポリス、ギリシア語で新しい都市という意味ですが、そう呼ばれた都市の近くにアクミンがあったと述べています。

アラン・ロイドは、このネアポリスについてずいぶん前に実際に論文を書き、それによって私も確信をもったのですが、ネアポリスというのはプトレマイスのことです。ネアポリスというのは、ギリシア人の都市の名前です。ヘロドトスでは、こういったギリシア語で都市名が表されたところはギリシア人の都市であり、エジプト人の都市ではありません。なぜならば、エジプト人の都市は、常に神の名前を含んでいるからです。だとすると、ネアポリス、新しい都市とは、ギリシア人の植民市に違いありません。こういった事情をあれこれ考え合わせると、アクミン近くにあるギリシア植民市は、プトレマイスだと考えられるのです。もしこの考えが正しいとすれば、プトレマイスの起源はプトレマイオス朝よりも古い時代に遡ることになります。おそらく、紀元前6～5世紀のことでしょう。

この考えが正しいか間違っているかを確かめる唯一の方法が、考古学なのです。おもしろいことに、私は自分の考古学の同僚に、この点について、また金鉢の所在について、東方砂漠の考古学に関する話をしています。東方砂漠では、紀元前6世紀のギリシアの土器がたくさん見つかっています。

ここで問題です。なぜ東方砂漠に紀元前6世紀のギリシアの土器があるのでしょうか？ 私は、紀元前6～5世紀には、東方砂漠に未知のギリシア人の植民地があったのではないかと考えています。それがデルタ地帯のナウクラティスに似ていると主張するつもりはありませんが、上エジプトでは、紀元前6～5世紀にギリシアとの交易があった可能性があります。そうだとすると驚くには値しないでしょう。ギリシア人は、この頃にはすでにここまでたどり着いていたのです。

ヘロドトスを読めば、他にも初期のギリシア人に關する記述を目にすることができます。それによると、紅海から砂漠を通過してナイル谷へ、あるいは西部のオ

アシスへと、多くの交易が行われていました。このことが、パズルのもう1つのピースなのです。もし私の仮説が正しいとすれば、そして、それを確かめる唯一の方法が考古学なのですが、プトレマイオス朝が上エジプトで行っていたことについては、書き直しが求められるでしょう。セレウコス朝や他のヘレニズムの王国がとった戦略と同様、彼らは、それ以前から存在してきたギリシア人の集落を再強化したのです。いいですか、これは、西アジアでもエジプトでも統治の一部分なのです。彼らがそうしたのは当然でした。

それは、なぜプトレマイスがここに置かれたのか、という疑問の答えにもなっていると思います。そこにプトレマイスが置かれたのは、プトレマイオス朝がそこを侵略したとき、すでにギリシア人がそこに住んでいたからなのです。それに、プトレマイオス朝は、南部にギリシア人の行政上の中心地を必要としていました。なぜなら、政治はギリシア語で行われていたからです。ですから、テーベやエドフに行かなかったのです。神官も大事でしたが、エジプトを治めるためには、ギリシア語を話せる人が必要だったのです。それで、すでにギリシア人たちが住んでいる場所、2世紀もしくはそれ以上前からギリシア人たちが住んでいた場所を発見、あるいは再発見したのです。確証があるわけではありませんが、私はこのように推測しています。

もう1つの史料は、北アフリカのキュレネの有名な碑文ですが、「キュレネの国制」として知られています。プトレマイオスは、プトレマイオス朝の重要な一部分であるキュレネにおける、市民団の構成などを定めています。

これがテクストの初めの部分ですが、キュレネ市民の要件が述べられている中に、ティニスより向こうの都市からの入植者についての言及があります。オースティンの翻訳では、ティニスについてギリシア語の碑文からは未知の場所であるという註釈が付されています。しかし実際には、エジプト学の視点から見ると、ティニスは上エジプトのよく知られた場所にあります。それは、アビドスのあった歴史の古い地域で、プトレマイスからも近いところにあたります。

これは、拡大解釈と言われてしまうかもしれませんが、私はプトレマイスの最初期の住民がキュレネからの移民だったのではないかと推測しています。なぜでしょうか。キュレネからの人々は騎馬の術に長けており、プトレマイオス朝の軍隊ではキュレネ人の騎馬隊のことが言及されています。彼らは、紀元前3世紀に

はエジプト各地に入植していました。ですから、プトレマイオス朝にとって重要な場所から、騎馬隊の指揮官をギリシア人の地域に配置することは、意味のあることだったと言えるでしょう。キュレネは、文化的にも重要な場所でした。言語についていえば、プトレマイオス朝の方言は、キュレネの方言だったのです。たくさんの有名な詩人、たとえばカリマコスもキュレネの出身です。ですから、キュレネは初期プトレマイオス朝の政治や文化にとって重要な位置を占めていたのです。

軍事的にも文化的にも、キュレネ出身者は重要です。プトレマイスの初期の入植者が、北アフリカのこの地、現在のリビアの人たちであったという推測には筋が通っていると思います。ただ、これについては何も分かっていません。プトレマイスの初期の状況については何も知られていないのです。あくまで推測にすぎません。考古学的調査によってしか、確証を得ることはできないでしょう。ただ、パピルスを読むと、キュレネの兵士たちは、紀元前3世紀当時のプトレマイオス朝の中では、最大の軍隊であったと書いてあります。新しいギリシア人の都市を強化したいのであれば、軍隊が必要でしょう。疑いもなく、軍事入植こそが、プトレマイスにおけるプトレマイオス朝時代初期の入植の形であったと思います。

しかし、これも仮説に過ぎません。都市の中でプトレマイオス朝の層を発掘するのでなければ、この説を確証することができないのです。これは考古学的な疑問なのです。今の段階では、いくつかの想像に過ぎません。皆さんのほとんどは、エル＝マンシャを見たことがないでしょう。人が訪れるような場所ではありませんから。ですから、都市や村のいくつかの様子、そして考古学的な悪夢とも評すべき現状をご紹介したいと思います。

古代の都市と同様に現代の村も丘の上であり、川のすぐそばにあるということが面白いのです。考古学的に言えば少し心配ですが。ナイル川がこの地でどのように流路を変えてきたのか、我々は全く知らないのですが、それは興味深い問題です。しかし、村の中を歩いてみると、古代の柱頭が転がっていたりします。専門家ではないので確信はありませんが、プトレマイオス朝末期かローマ時代初期のものでしょうか。あちこちに遺物がいろいろ散らばっており、村のあちこちで古代の柱などが再利用されています。一方で、新しい建物によって破壊された場所もあります。そういったところを目の当たりにすると、考古学の将来を考えて、

少し焦りを感じますね。

再利用された柱は、このように文字通り村のいたるところにあって、私の知る限り、完全には記録されていません。もし、調査に行くことが許可されれば、そういった遺構を注意深く記録することが課題の1つとなるでしょう。これは典型的な現代の家屋です。実際この村には、とても美しい家屋がいくつかあります。何よりもエジプト人の村らしい家だなと思いますね。

問題は、現代の村が古代の都市そのものの真上に広がっていることです。新しい大きな建物の基礎工事のために、古代の層が破壊されています。それに、そういった家屋の真下では、盗掘も行われています。考古学的遺物のある家屋の床下を掘っているのです。

これは、丘の上の家屋の床下ですが、遺物がぎっしりと堆積しています。広い範囲に土器などが広がっています。これをみると、再利用された石材のイメージが分かるでしょう。疑いようもなく、ここでは、文字通り何メートルもの厚みで文化層が堆積しています。ここでは、紀元前5世紀かおそらくそれ以前から現在に至るまでずっと居住が続いてきました。ですから、考古学的な作業を行う上では、まさに悪夢なのです。

この一帯はナイル川の近くで、古代の都市があった丘に近接したところです。これは1980年代に2シーズンにわたってエジプト人が発掘した地点です。テスト・ピットやトレンチなどが見えます。しかし、今では現代の村のごみ捨て場になってしまっています。私の疑いは、この発掘が記録されているのかどうか、ということです。2シーズンの作業に関して、出土品は保管されているのですが、報告書はまったく公刊されていません。ですから、私たちは、この夏に発掘作業を始めることができたらと切望しているのです。アッラーの思召しがあれば！ 許可が下りればいいのですが、建築主たちは、私たちに見られるのをとても恐れていて、考古学的な作業にことごとく反対しています。

我々が望んでいるのは、そこに何かあるのかを調査することです。どれくらいものがありそうかについては、今お話しした通りですが、分かるのは、そのへんを歩き回って得られた土器片の分布状況くらいです。この写真からは、丘が川からどれくらい高いかがよく分かるでしょう。

それから、現代の建造物の中に組み込まれた古代の壁があります。中世もしくはさらに古い城壁が、現代の村の中に残っているのです。ですから非常に複雑です。グーグルアースでみると、町の中心地を囲むよう

に古代の城壁の跡らしきものが見えると思います。ある意味わくわくしますね。衛星写真でも見えるものがたくさんありますし、さらには、そういった城壁から当時の人口を推定することもおそらくできます。ですから、都市の城壁もおもしろいのです。

おわりに

まだいくつかスライドがありますが、そろそろ時間がなくなってきたので、最後に考古学と文献史学との共同作業がもたらした成果に関する例を紹介しましょう。10年ほど前、いやもっと前かもしれませんが、エドフから紅海へと抜ける途上、このあたりですが、ステイーヴン・サイドボトムと彼のチームが、この興味深い小さなギリシア語の碑文を発見しました。一見したところ、そんなに重要なものには見えません。でも私には本当に素晴らしい発見だと分かりました。これは里程標で、そこから川までの距離を示したものでした。ですから、何キロというのが書かれていて、それから、その地域一帯を治める役人の名前が書かれていました。それがこの碑文の面白いところだったのです。

役人の名前はロドンといい、リュシマコスの息子で、この地域を管轄していたプトレマイスの市民でしたが、エドフの役人を務めていました。これは、プトレマイスに関する今まで知られている最も古い碑文になります。紀元前246年ですので紀元前3世紀半ばです。プトレマイスの市民についての記録は、それほど多くはありません。

ところで、プトレマイスからは、あるキュレネ出身の兵士に関する有名なバイリンガルの文書が知られていて、そこにもリュシマコスの息子ロドンなる人物が登場します。彼は、東方砂漠を含む上エジプトの統治にあたっていたようです。こちらは、デモティックのパピルス裏面です。証人リストと呼ばれているものですが、16人の名前のリストです。彼らは、裁判の証人で、これは標準的なエジプト人の法的文書です。すべてエジプト人の名前なのですが、一箇所だけが例外で、デモティックでロドン、リュシマコスの息子と書かれています。

これはよい例ですね。プトレマイオス朝の歴史家ならば、ギリシア語とエジプト語の史料について知っておく必要があります。パピルス同様碑文についても知っておく必要があります。デモティックのテキストは紀元前220年ごろです。これについて私はちょっとした論文を書いたことがあるのですが、これは同じ人間

に言及していると考えられます。私の考え方が正しいとすれば、これは同一人物です。このことにより、上エジプトにおけるプトレマイオス朝のストラテジーや、なぜこの王朝がそれほど繁栄したかについて、多くのことが分かります。プトレマイオス市民は、紅海への道を含む広い範囲を統治していただけではなくて、エドフのような都市におけるエジプト人の民事的な裁判の証人にもなっていたのです。なぜなら、エジプト語の契約書にギリシア人の名前が出てくるというのは、通常はありえないからです。契約の証人としてギリシア人の名前が出てくるデモティックのテキストは、ほんの2、3しかありません。これがその1つです。非常に面白いです。

では、なぜ上エジプトや神殿などが川沿いにあるのでしょうか？ 紅海の交通を考えてみると、紅海からの資源を運んだということが考えられます。象もやってきます。これらの重要な神殿のある都市は、プトレマイオス朝の繁栄にとって欠かすことができません。それにリュシマコスのような人物、リュシマコスの息

子のロドンなども、プトレマイオス朝の繁栄に欠かすことができません。私の考えでは、こういう理由によって、王朝は300年ほど続いたのです。

最後にもうちょっと言わせてください。考古学は、プトレマイオス朝の歴史やその他一般的な古代史の分野の将来を考える上で、本当に重要だと思います。その国や植民地において何が起きたのか、都市の規模はどれくらいか、などなど、さまざまな疑問に答え得るのは考古学だけなのです。

プトレマイオス朝エジプトについていえば、さらにプトレマイオス朝を調査できることを望んでいます。プトレマイオス朝エジプトは、人々が考えてきた以上にエジプト的なところだったと思います。それと同時に、人々が考える以上にギリシア的な側面をも持っていました。紀元前最後の数世紀間に及ぶプトレマイオス朝エジプトの歴史は、プトレマイオス朝がエジプトで何を行ったかを理解する上で本当に重要です。

ご意見、ご質問などを頂ければ幸いです。

司会者：今日の話を通して、このプトレマイオスのプロジェクトというのは、これから実際にサーベイをするという段階ですけれども、今日の講演の初めにあったように、かつてはギリシア語のパピルスだけからスタートした研究が、デモティックのパピルスであるとか、最後にお話があったように碑文であるとか、他の史料も視野に入れつつ、新しい展開を見せていて、それによってエジプト人とギリシア人とがこのプトレマイオス朝のエジプトでどういう関係を結んでいたのかという点も明らかになるであろうと。そういうふうな結論でした。ご質問があったら、どうぞ。

マニング：ちょっと、この史料が今は失われてしまったことを言わなければいけないと思います。東方砂漠の倉庫から盗まれてしまったのです。ですから、そうなる前に発表できたて良かったです。スティーヴン・サイドボトムと私と、それからロジャー・バグナルとで、何年か前にこのテキストを発表しました。こういった遺物を盗む気持ちは理解できませんが……。

司会者：これは、残念ながら珍しいことではないですね。よく聞く話でもあります。紀元前6～5世紀に、プトレマイオスにギリシア人が植民していたかもしれないという話は非常に面白かったです。私はそのように考えていませんでした。なぜならば、我々の多くは、アマシス王がギリシア人にナウクラティスを居住

地として与えたというヘロドトスの証言を信じてきたからです。紀元前6世紀におけるエジプト内部のギリシア人居住地の問題は、大変に興味深いです。ヘロドトスもあまりよく分かっていなかったのかもしれない。

マニング：そうですね。ナウクラティスは特別な交易都市で、ギリシアの交易商人の間でも特別な地位を持っていました。上エジプトについても、いくつか知りたいことがありますね。もしそういったところが存在するとしたら、その手の植民市が他にもあるということになるでしょう。あなたの考えていることは正しいです。ですが、上エジプトにギリシア人がいたということは分かっていますよね、土器がありますし。ですから何か起きたということは推測できます。どうやってギリシア人集落がつくられたかは分かりません。おそらくそれほど広くはない、小さなコミュニティであったのでしょう。ヘロドトスはアクミンについても言及しています。アクミンの非常に変わった宗教儀式についてですが、先ほど述べたようにギリシア人とエジプト人の慣習が混じったものと伝えています。でも、あなたがいうように、ナウクラティスがギリシア人商人の間で特別な地位を保ち続けたことも事実です。

Q：前にも言いましたが、現代の村の下を実際に掘



っている人もいますので、時には発掘の必要がないこともありますよね。で、考古学者の方が正しい選択ができる、正しい場所を記録できるとするならば、最初の疑問には答えられるでしょうね。非常に簡単なことだと思います。そうすることが、より考古学を救うことにもなるのでしょうかね。エジプト政府が本当にやりたいこと、そして考古学を救うこと、2つのことがあります。おそらくあなたがやることは、考古学を救うことだけです。でも、その際に、そこに住んでいる人々の政治的状況にもきちんと関与していかなければなりませんよね。それは非常に興味深いことです。

司会者：私は考古学の貢献については、それほど樂觀的ではないのです。というのも、紀元前3世紀というのは、歴史史料が乏しいだけでなく、考古学的に特に見えにくい時代だからです。

マニング：そうですね、なぜでしょう？

司会者：土器を調べると……紀元前1, 2世紀の土器はヘレニズム化を遂げているので、簡単にそれとわかります。4世紀のも、まあいいですよ。でも、紀元前3世紀の資料はどうやったらいいか分かりません。土器のタイプがほとんど分からないのです。通常、3世紀の資料を識別するのはちょっと難しいです。これは深刻な問題です。

マニング：そうですね。土器だけでなく、プトレマイオス朝に由来する碑文も紀元前3世紀にはあまりありません。

司会者：それが見つければいいと。

マニング：そうですね。それを期待しています。その他のところから見つかっているプトレマイオス由来の

ギリシア語の碑文で、紀元前2～1世紀のものについては発表したことがあります。しかし、紀元前3世紀のものはありません。歴史史料についても同じようなギャップがあるように思います。考古学、ナイル谷で考古学を続けていくことには多大な問題があると思います。地下水位のことも大きな問題でしょう。

頭を痛める問題は無限にあります。しかし、私は、やらないよりはやった方がましと思っています。プトレマイオス周辺の詳細な分布図をつくることや一帯のサーベイをすることなどは、ぜひやりたいですし、すでにやることを決定しています。川の東側の採石場にも、きっと史料が残されているでしょう。

司会者：他の質問はいかがでしょうか。

Q：私は、上エジプトの神官についてお尋ねしたいのですが、私が理解しているのは、多くの神殿があり神官がいたということです。この神官たちは、地域の経済にどうかかわっていたのでしょうか？

マニング：それは、経済構造に関する素晴らしい質問ですね。エジプトの経済構造は、伝統的でかつ複雑なものでした。ある地域における神殿、大きな神殿というのは、それ自体が非常に大きな土地を所有し、経済的に自立していました。一般的に神官は、地方の多くの農地の管理者だったわけです。ですから神官、組織としての神殿は、灌漑を行うにあたって、古代エジプト経済において非常に重要でした。地方の行政単位として、神殿は農業を行うためには欠かせなかったのです。プトレマイオス朝が現れるはるか昔からそうでした。

エドフやテーベは神官に依存しており、これらは特

に裕福な神殿でした。広大な土地を持ち、神官はプライドも高く、というのも世襲職だったのです。父から息子へ、というように。こうして地方の古い伝統を守っていました。彼らは長い歴史を持っていたのです。ですから、王が神官を排除することは、そう簡単にはいきませんでした。名声を保つためには、彼らが必要だったのです。彼らは識字階級であり、その地域で行政上の役割も担っていました。彼らは私的な契約なども結ぶことができました。

ですから、これらの神殿は大変に古く、経済的な面だけでなく、宗教的な面からも、そして国家のイデオロギーの側面からも重要でした。神官は王権を支える土台でもあったのです。換言すれば、エジプトの王となるならば、王権の一歯車としての神官が必要だったのです。神官なくして王にはなれないのです。これは重要なことです。なぜなら、過去のギリシア人の歴史家は、プトレマイオス朝のことを外来の支配者としてみる傾向があり、その政治史的な展開に注意を向けてきました。しかし、それだけが起こっていたわけではありません。プトレマイオス朝は、国全体を統治するために神官のサポートを必要としていました。それで、彼らに経済的な特権を数多く与えました。プトレマイオス朝は神官たちに、地方経済の続行を認めました。プトレマイオス朝がやってくる前と同じようにしてよいと言ったのです。プトレマイオス朝は、神殿を建て直すだけでなく、神官をサポートすることによって、ある意味で、古代エジプトの官僚機構をも立て直したのです。芸術や文化などの側面においても、プトレマイオス朝の時代がルネサンスとなったのは不思議

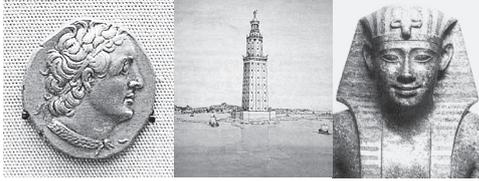
ではありません。プトレマイオス朝の庇護のもとでは伝統文化が発展し、それはローマ支配下の状況とはかなり異なったものだったのです。

私がプトレマイオス朝を最後のファラオと呼ぶのは、このような理由によつてです。彼らはエジプトをファラオのように統治しました。これはペルシア人がエジプトを一地方として統治したのとはかなり異なるやり方です。ローマ人も、エジプトを一地方として扱いました。これらの場合、エジプトの文化は重要視されません。研究文献の中で、プトレマイオス朝は、エジプトへの徴税だけに気を配っているかのように扱われがちですが、そんなことはなかったのだと私は言いたいです。プトレマイオス朝は、エジプトの文化、宗教、神殿などに対し、ファラオのようにエジプトを統治するために、非常にさまざまな気配りをしていたのです。

ですから、私の考えでは、プトレマイオス朝エジプトは、エジプト人の国家といえるのです。ギリシア人の組織、ギリシア人の言語が重要であったとはいえ、これは決してギリシア人の国家ではありませんでした。アクリスのような場所で、ギリシア人兵士がプトレマイオス朝国家の出先機関として重要だったとしても、です。さまざまな場所でこのことが分かります。銀行や貨幣制度など、財政上の仕組みはギリシア的でしたが、それらはファラオによる統治に組み込まれていました。それこそが私の本当に興味を引かれる部分であり、また大変に複雑だと思う部分です。実に興味深い国家だとは思いませんか？

司会者：どうもありがとうございました。

Ptolemais: the lost city of the Ptolemies



J G Manning
joseph.manning@yale.edu

1

The Ptolemaic state in historic context

Dynasty 4	2613-2494 BC	119 years
Dynasty 5	2494-2345 BC	149 years
Dynasty 6	2345-2181 BC	164 years
Dynasty 12	1985-1773 BC	212 years
Dynasty 18	1550-1295 BC	255 years
Dynasty 19	1295-1186 BC	109 years
Dynasty 20	1186-1069 BC	117 years
Dynasty 26	656-525 BC	131 years
First Persian period	525-404 BC	121 years
The Ptolemies	305-30 BC	275 years

Table 1. Length of important dynasties in Egyptian history.
Year dates taken from Shaw (2000).

January 7, 2012

JG Manning

4

What are the questions?

- How did the Ptolemies take over and govern an ancient, bureaucratic empire?
- How do we understand the Ptolemaic state in the broad historic context of Egyptian and premodern states?
- What was the impact of Ptolemaic governance on Egypt?
- What was the balance between Greek and Egyptians?
- All of these questions suggest that we focus on institutions

January 7, 2012

JG Manning

2



5

The economy

- Role of the state vs. role of demographic change
- economic intensification- increased urbanization, increased long-distance trade, and increased monetization
- structure- intensified agrarian production, royal banks, and royal granaries
- Greek as administrative language
- Incentive structure
- Contract wage labor, in the agricultural sphere as well as for short-term building projects, canal building and the like, was common, payment, daily or monthly, being done in kind as well as cash
- Ptolemaic taxation policy, and the creation of banks, that required some taxes to be collected, or at least calculated, in terms of money played key roles in monetization
- The paucity of price data preserved in the papyri is a serious barrier to understanding the long-term performance of the Ptolemaic economy
- The ARMY was the key driver of the new fiscal system

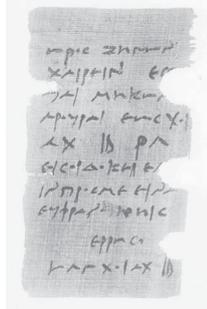
Interpretive problems

- Emphasis on state structure rather than institutions/human behavior
- Assumptions of centralized state, and controlled economy

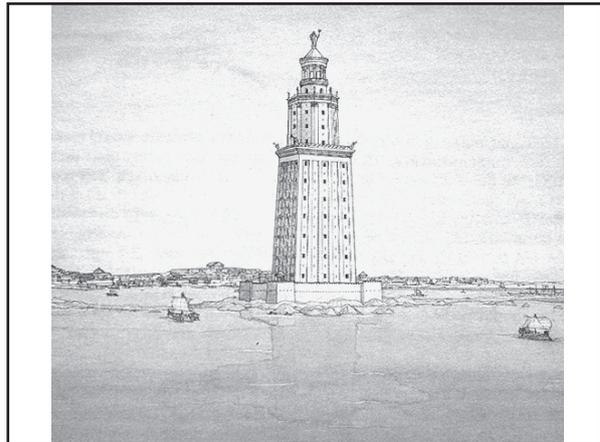
6

Sources/problems

- How much survives?
(Posener = .0001 %)
- Greek papyri
- Demotic Egyptian papyri
- Temple inscriptions
- Emphasis on culture
- Other methods: historical sociology, Economics etc.
- Configuration of academic departments



7



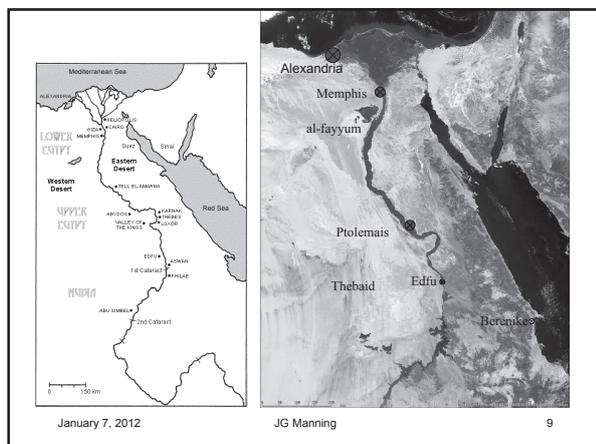
More problems

- Emphasis on Greek sources leads to emphasis on Greek population and on the Fayyum region
- The Zenon archive
- Fayyum was atypical
- Static analysis
- Efficient, despotic state

8



11



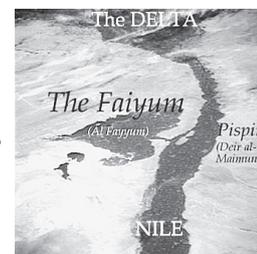
January 7, 2012

JG Manning

9

Reclamation of the Fayyum

- Archives tell us of the activity under Ptolemy II and III, 260's-240's BC
- Arable trebled (5% of arable)
- Many new settlements, movement of population, experimentation
- Administrative centralization > census, tax districts





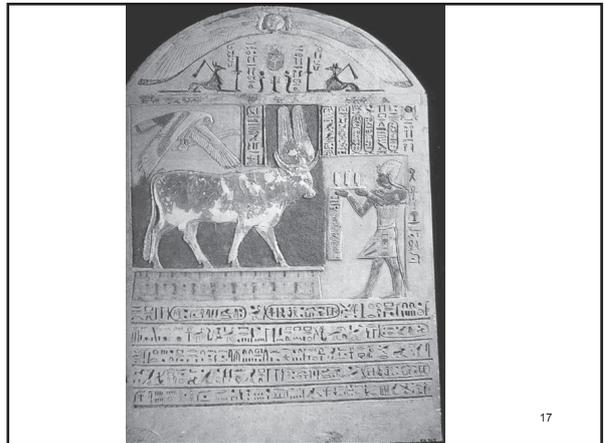
3



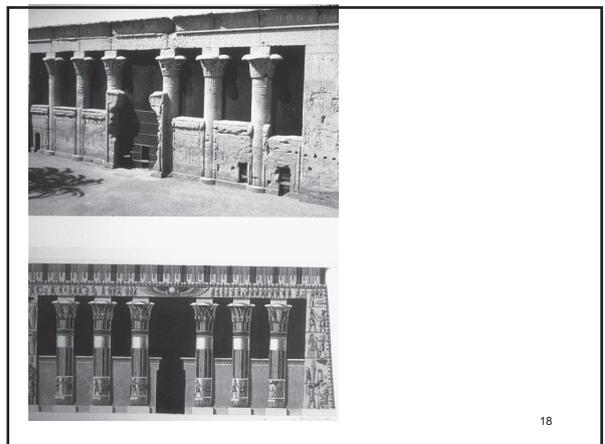
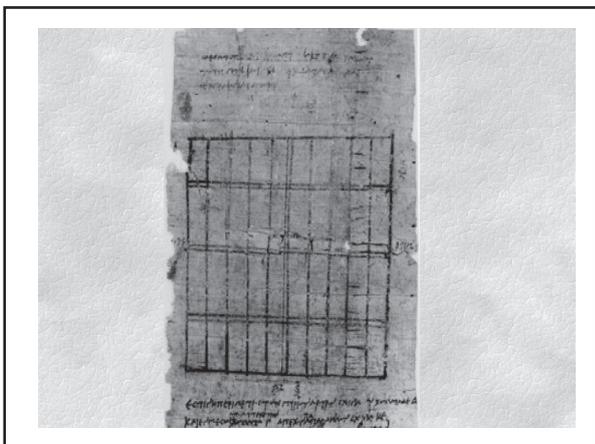
16

Zenon Archive

- “An Egypt in miniature” ?
- Largest archive, 261-39 BC, but estate 257-48 BC
- A model estate, experiments, w/ economies of scale for labor & production, potential revenue for officials
- State’s need for revenue, soldiers
- Exceptional and brief, but cf. Egyptian plantations of elites, Persian period estates of officials, and the Heroninus archive of 3d century AD



17



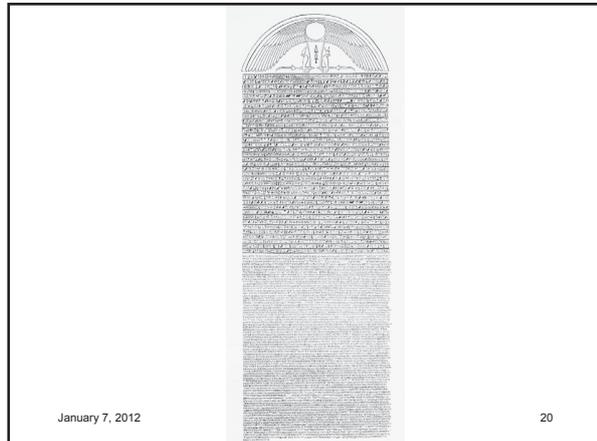
18

Egyptian temples

- Ca. 50 built
- Concentrated in Upper Egypt
- Why?

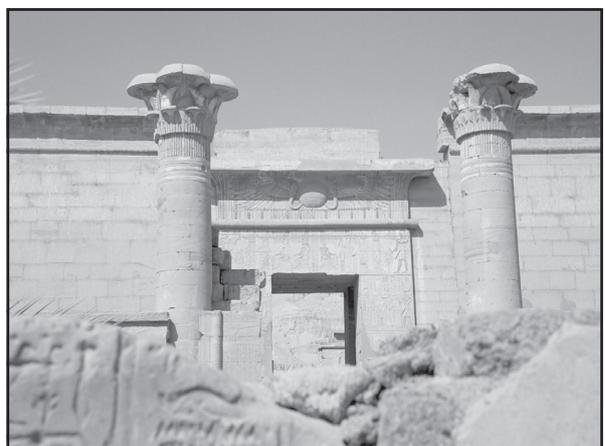


19



January 7, 2012

20



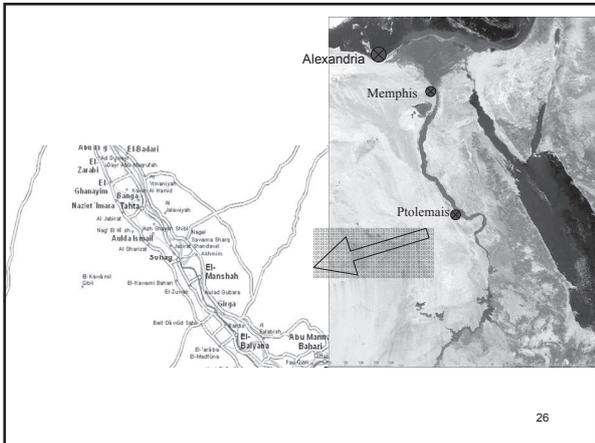


Description of Ptolemais (el-Manshah):
Strabo 17.1.42; Herodotus 2.91

"Then one comes to the city of Ptolemais, which is the largest of the cities in the Thebais, is no smaller than Memphis, and also has a form of government modeled on that of the Greeks." (1st century BC)

Akhmim described as "near Neapolis" (5th century BC). The name suggests a Greek settlement

28



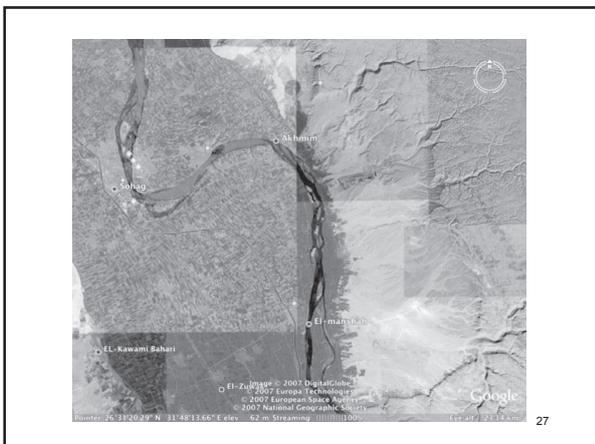
26

SEG IX, 1

[Good Fortune?] Shall be citizens [the men] from [a Cyrenaean father] and a Cyrenaean mother, and [those born from] the Libyan women between Catabathmos and Authamalax, and those born from the **[settlers] from the cities beyond Thisis**, whom the Cyrenaeanes sent as colonists [and/those] Ptolemy designates, and those admitted by the body of citizens, in conformity with the following laws.

[Trans. Austin (2006:69)]

29



27



